

## 私たちの

角川ドワンゴ学園 N高等学校 大隈 ゆうか

平和って、何だろう。そう考えたとき、私の頭に一番に浮かぶのは、核兵器のない世界です。私は長崎市で生まれ育ち、保育園、小学生の頃から、地元・長崎に落とされた原子爆弾について学んできました。そんな私には、平和の礎には、大前提としての核兵器廃絶が必要だと、明日が核によって奪われない確証が必要だと、そう思えてならないのです。私は、平和には、多様性が必要だと思っています。平和には答えがなくて、人それぞれの感性があるものだと、そしてそれが尊重されるべだと思っています。ですが、その多様性を成り立たせるのは、核兵器の存在がないという前提の上です。

私の曾祖母は、十九歳の時に長崎で被爆しました。曾祖母に話を聴いた祖父から話を聴いて、私は核兵器によって一瞬のうちに奪われる命や、変わる常識、続く辛く苦しい生活、それでも生きた曾祖母の強さを知りました。長崎の復興に尽力した被爆者の力を知りました。反面で、被爆四世を名乗る私に、ある時こう問う人がいました。

「大きくなっていく数字に意味があるのか。」つまり、二世、三世、四世、と数字が増えていくと、その意味は薄れていく、そう考えているというのです。その人は被爆三世でしたが、自分は祖父母の代が被爆者であるだけ、そういう認

識で、実感というものもあまりなく、何か詳しいわけでもその苦しみを間近で見えてきたわけでもない。だからもう、その数を数えていく必要はないのではないか。そう言っていました。

ですが、私はそれは違うのではないかと思います。数字が大きくなっていく、その意味を、その人の言葉を聞いて、改めて考えました。二世、三世、四世、と数字が一から離れていくにつれて、原子爆弾が投下されてから、時が過ぎていきます。今年で原子爆弾投下から七十五年を数え、被爆者である私の曾祖母は七年前に亡くなりました。私はその時小学四年生で、曾祖母から直接被爆の体験を聴くことは、叶いませんでした。減っていつてしまう、被爆者の方の話 を直接聴くことのできる機会。あの恐ろしさ、悲惨さの記憶が風化してしまうかもしれない。これから先、あの恐ろしい八月の日の記憶は、薄れていつてしまうのでしょうか。

いいえ。そんなことはありません。なぜなら、二世がいるからです。三世、四世が、そして語り継ぐことを決意した人たちがいるからです。二世、三世、四世、となるにつれて、後世に伝えていかなければならない、その使命は強くなっていくと思います。その数字が大きくなっていくごとに、時が過ぎて忘れられてしまう記憶に、私たちは危機感を覚えなければなりません。その数字の大きさは、使命である。一人の力は微かだけれど、声を上げ続けることで、成し

得るものがあると信じています。

また、想像することは核兵器の廃絶を訴え、各々が描く平和な世界を実現する上で、とても重要なことです。私たちは、被爆者の苦しみを体験することはできません。一瞬にして奪われた未来も、平凡に続いていくと信じていた明日が閉ざされた苦しみも、実際に味わうことはできない。だけれど、想像を通して、少しでもその恐怖や苦しみを身近に感じて、核兵器のある世界に生きる自分のこととして考えることが必要だと考えます。私たちは当事者なのです。今現在、彼等が七十五年前に受けた苦痛を、私たちが感じることはないという保証はどこにもありません。なぜなら、この世には核兵器が存在しているからです。核兵器がこの世界から廃絶されない限り、私たちには同等にその可能性があります。私たちの明日がキノコ雲の下にないことを、断定できる人間はいません。残念ながら、この世界に一人たりともいません。そんな世界に生きていくこと、恐ろしいと思いませんか。それは、平和ですか。過去を知り、過去に学び、二度と繰り返さないために、私たちの明日に核兵器が影を落とすことのないように。二〇一三年八月九日に、長崎市の田上富久市長が宣言した、平和宣言にこのような文があります。

「そして、あなたが住む世界、あなたの子どもたちが生きる未来に核兵器が存在しているのか。考えてみてください。互いに話し合ってみてください。あな

「たまたちこそが未来なのです。」

「誰も変えてくれない、のではなく、未来は私たちが作り上げるものです。私たちの一歩で、「核兵器廃絶」「平和な世界の実現」を求める声を積み重ねて。」

「微力だけど無力ではない、自分たちの持つ力を信じています。」